

# 奉行所と出島

—「鎖国」で生まれた双子の兄弟—

宮 崎 貴 夫

2024年5月

『西海考古』第14号 抜刷

# 奉行所と出島

—「鎖国」で生まれた双子の兄弟—

宮崎 貴夫

## はじめに

長崎港に浮かぶ出島和蘭商館跡（出島阿蘭陀商館跡）について、日蘭文化交渉史の片桐一男氏は『出島－異文化交流の舞台』（集英社新書）で、口絵にオランダ・ハーグ国立中央文書館蔵の『長崎の港と町』の絵図を掲げて、「絵になる出島」という詩的な文章を記している（註1）。

紺碧の空の青が溶け合う真夏の水平線。その彼方から三本のマストの帆影を近づけてくるオランダ船。嚴重な臨検を受ける。やがて大きな船体を長崎の湾内に現す。そこは、古来、鶴の湊と呼ばれる天然の良港。細波の波頭が強い日射しを受けて一面に煌めきわたる。眠っているかのようなその波の上に、オランダ船を背景に、扇の地紙の形をした「出島」が華麗な姿を横たえている。なんと絵になる美しい小島ではないか。

美しい「出島」を包み込むかのように描かれた長崎港鳥瞰図。日本にも、外国にも、なんと数多くのこっていることだろうか。彩色が施され、美しく仕上がっているものが多い。いつ見ても、いつまで見ていても、飽きることがない（片桐 2000 p. 8）。

この絵図は、長崎の町並の岬先端に奉行所と出島、新地唐人荷蔵と唐人屋敷、南風にのって来港したオランダ船と唐船を、立山付近の山から長崎港口を俯瞰した風景画であり、オランダ国旗のはためく出島は南国の陽光に輝いていて見える。

出島は、片桐氏に代表される日蘭文化交渉史や日欧交渉史、対外交渉史の歴史研究者によって、長崎の国際貿易港を象徴する「ヨーロッパに開かれた窓」として数々の著作（森岡 1976・1994・2005、山脇 1980、宮永 1986、大林組プロジェクトチーム 1994、安高 2019、片桐 2000）で紹介され、長崎出島史跡整備審議会によって出島に関係した絵図が集成されて『出島図』（中央公論美術出版）として1987年に刊行され、歴史教科書においても出島は「鎖国」を象徴とした場所として記述されている。

しかし、出島を見下ろす「森崎」と呼ばれた岬の先端にあった長崎奉行所については、天領長崎を支配した長崎奉行に関する研究（外山 1988、鈴木 2007・2012、木村 2016）が見られるものの、長崎奉行所の機関や施設自体についての具体的な研究を見ることができない。片桐氏が表現しているように出島は唯一の「西欧に開かれた窓」として明るく輝かしい場所である。一方、長崎奉行所は、江戸幕府の外交と海外貿易を管轄する重要な出先機関であり、明治以後には2017年まで長崎県行政の中核として一貫して政治・行政の中心的な場所であった。それは旧長崎県庁前に国道34号・57号・207号の終点と国道206号・351号・324号の起点の道路元標があることにも象徴されている。だが、歴史のなかで光輝く出島に比較すれば、長崎奉行所の姿は影のような存在のようにも見える（註2）。

しかし、この歴史の偏重とも思われる見え方・歴史観は、比較歴史学の羽田正氏が『新しい世界史へ』（岩波新書）のなかで、「江戸時代の長崎は、実際はほとんど中国貿易の港であったにもかかわらず、「ヨーロッパ文明の窓口」と繰り返し強調される」として、私たちが「ヨーロッパ中心史観」とらわれていることを指摘している（羽田 2011 p. 81, 82）。また、明治時代の成立した国民国家の「国史」（ナショナル・ヒストリー）のなかで江戸時代を封建的遺制として退ける思想は、近年の江戸時代像の見直しによって変わってきたが、長崎奉行所についてはまだ近代的史観の枠組みに囚われて

いるようである。出島和蘭商館は、江戸幕府がキリシタン禁教に基づくいわゆる「鎖国令」によって長崎港に築造された人口の小島であるが、それ同時に出島の「監視が行き届く場所」（森岡 1994 p. 3）に長崎奉行所がある。奉行所と出島は、「鎖国」制度・政策で生まれた存在なのであるが、出島は西欧との対外交渉史・貿易史の視点で、長崎奉行（所）は日本近世史の視点で捉えられていて、両者の関係を論じた研究はみられない。これは長崎の文化に貢献したキリスト教史や中国明・清との対外交渉史についても同様で、それぞれ個別に専門的研究が営まれており、縦割りになった各研究のセクションの壁をこえた総合的研究や学際的な交流が行われていない現状が認められる（註3）。



第1図 江戸時代後期の長崎（荒木周道／長崎市役所1913）

考古学が調査研究の対象としている「遺跡」は、さまざまな関係の糸が絡みあって結ばれた「歴史の記憶」が地層のように積み重なっている場所である（註4）。貿易都市長崎の実像については、現在、縦割りになっている歴史研究の成果を、遺跡の調査研究のなかで総合的に捉え直していくことで、都市遺跡としての長崎の豊かな歴史像を描いていくことができるのではないかと考えている。本論稿では、このような観点で、長崎奉行所と出島をみていきたい。

## 1. 貿易都市長崎の考古学調査研究

考古学的方法による港湾都市長崎の調査研究は、1990年代から長崎市教育委員会が長崎市内の発掘調査を実施するようになり、江戸東京博物館が企画した『掘り出された都市』のなかで、「長崎市文化財課の永松実氏が「長崎の歴史と考古学」を執筆したことが嚆矢となっている（永松 1996）。

長崎最初の六丁町の大村町に所在した万才町遺跡（<sup>まんざいまち</sup>県庁新別館、以下、万才町遺跡）は、長崎県教育委員会により1993年に調査が実施され、1995年に調査報告書が刊行された。旧町の居住者名が記された絵図や火事の年代を記した記録があったことから、確認された火災層を「鍵層」として、陶磁器編年の年代によって時期を押さえ、1571年の六町の町建てから400余年にわたる遺跡の変遷を報告書にまとめた（宮崎編 1995）。2020年には万才町遺跡の変遷について再検討している（宮崎 2020 b）。

また、万才町遺跡の発掘現場を共に担当した川口洋平氏は、2000年に著した「一括資料からみた長崎遺跡群」『西海考古』第2号のなかで、長崎市内の個々の近世遺跡の調査成果をミクロの視点で見るとはならず、「港市長崎を形成した個々の場や機能の集合体」として体系的にマクロな視野で捉える「長崎遺跡群」を提唱して西欧・中国に開かれた国際貿易港である「港市長崎」を考古学的方法によって総合化して把握することを試みており（川口 2000a ほか）、なかでも『世界航路へ誘う港市長崎・平戸』（新泉社）では、出土資料によって長崎と平戸の具体的な歴史像を描いている（川口 2007 b）。

また長崎市の扇浦正義氏によって近世長崎の発掘調査の概要が紹介されているが、陶磁器研究が中心となっている（扇浦 1994・2021 他）。最近では長崎市文化財課の田中学氏が、九州各藩が長崎に設けた長崎蔵屋敷や「近世港湾都市長崎」の都市構造の発達過程について意欲的な研究をはじめている（田中 2019・2022）。そして、考古学研究者が見た長崎については、坂井隆氏の『「伊万里」からアジアが見える』（講談社選書メチエ）があり、山崎信二氏の『長崎のキリシタン史』（雄山閣）は長崎の成り立ちやキリシタン考古学について示唆に富んだ研究となっている（坂井 1998、山崎 2015）。

出島は、1922年に「出島和蘭商館跡」として国史跡に指定され、1978年に長崎市出島史跡整備審議会が設置されて1984年から発掘調査が実施されている。出島の復元整備事業は、1996年からの発掘調査の成果に基づき、当時の建物や石垣ほかの復元整備が行われ、現在、長崎観光の目玉となって観光客が訪れる賑わいの場となっている。出島の調査研究は、長崎市の山口美由紀氏が『長崎出島』（同成社）、『旅する出島』（長崎文献社）などを執筆して、研究発表等も行うなど、出島の考古資料を基礎とした考古学研究と、絵画史料などの歴史情報を総合した出島の具体的な実像が明らかになっている（山口 2008・2016・2019）。

埋蔵文化財包蔵地として遺跡名が「長崎西役所跡」とされている岬先端の場所は、元亀2年（1571）に長崎最初の町である六丁町が町建てられたときに、イエズス会に教会用地として提供され、サン・パウロ教会が建てられ、その後、被昇天の聖母教会（サンタ・マリア教会）とイエズス会本部ほかの施設が置かれた。慶長十九年（1614）の教会が破壊焼却の後には、糸割符宿老会所が設けられ、その後、長崎奉行所、長崎奉行所西役所が置かれた。岬先端に建てられたサン・パウロ教会とサンタ・マリア教会については、キリシタン史の片岡弥吉氏が「岬の教会」と名付けている（片岡 1962）。

表1 長崎の町に関わる出来事と岬先端にあった施設の変遷

変遷	西暦	和暦	長崎の町に関わる出来事	
大村領	1571	元龜1	宣教師フィゲイレド、大村純忠と協議し、長崎をポルトガル貿易港とする	
	1571	元龜2	六丁町町建。岬の波止場の傍らに小さな聖堂を建てる(サン・パウロ教会)	
	1573	天正1	諫早西郷氏・深堀氏、長崎を攻撃(天正2年まで)木柵と堀を掘り防備を固める	
教会領	1578	天正6	深堀氏、長崎を攻撃。軍船フスタ船と大砲で撃退。長崎に400以上の家屋がある。	
	1579	天正7	長崎町方、長崎甚左衛門と戦う。日本巡察師バリニャーノ来日	
	1580	天正8	大村純忠、長崎六町と茂木をイエズス会に寄進。	
豊臣公領	1581	天正9	天正遣欧少年使節、長崎港を出港	
	1584	天正12	有馬晴信、浦上の地をイエズス会に寄進	
	1587	天正15	秀吉、パテレン追放令を發布。秀吉、長崎、茂木、浦上を接収	
徳川公領	1588	天正16	秀吉、長崎を直轄領とする	
	1590	天正18	遣欧少年使節、長崎に帰着。このころ長崎の人口約5,000人	
	1592	文禄1	寺沢志摩守長崎奉行に任じ、代官に村山等安を任命。被昇天の聖母教会破壊される	
	1593	文禄2	秀吉、教会と修道院の建設を許可、昇天の聖母教会を再建	
	1595	文禄4	このころ長崎の人口約8,000人	
	1597	慶長1	西坂で26聖人殉教(慶長元年十二月十九日)	
	1601	慶長6	長崎最初の大火灾。このころ家康、朱印船制度を創設	
	1603	慶長8	家康、小笠原一庵を長崎奉行とする。長崎天領となる	
	1604	慶長9	糸割符制が始められる。家康が渡航朱印許可証を許可	
	1605	慶長10	内町と外町、長崎村、浦上村の一部が徳川公領(天領)となる(長崎換地)	
	1611	慶長16	このころ長崎の人口約15,000人	
	1612	慶長17	幕府、天領と有馬領などに禁教令を発する	
	1614	慶長19	宣教師・高山右近らを海外に追放。長崎の11ヶ所の教会を破却。森崎に糸割符宿老会所を設置。このころ長崎の人口約25,000人	
	会所	1616	元和2	唐船以外の外国船の来航を長崎・平戸に限る。長崎の人口24,693人
		1622	元和2	長崎で宣教師・信徒ら55名を処刑(元和の大殉教)
		1624	寛永1	スペイン船の来航を禁止
	奉行所	1626	寛永3	このころから長崎奉行の信徒弾圧が強化される
		1631	寛永8	奉書船制度始まる(朱印船に老中奉書の携帯を義務づける)
		1633	寛永10	奉行屋敷が出火、糸割符会所も類焼。糸割符会所と替地して奉行所を移転
1634		寛永11	出島(築島)の築造を着工。僧如定により中島川に眼鏡橋が架けられる	
1635		寛永12	中国船入港を長崎に限定。日本船の海外渡航と帰国を禁止(朱印船貿易停止)	
1636		寛永13	出島完成。市中来泊のポルトガル人を出島に移す	
1639		寛永16	ポルトガル人を出島から退去させ来航を禁止。中国・オランダとの貿易のみ許可	
1641		寛永18	オランダ商館を平戸から出島に移し、オランダ貿易を長崎に限る	
1647		正保4	ポルトガル船長崎に入港。5万の兵で警備。このころ肥前陶磁の海外輸出が始まる	
1655		明暦1	糸割符商法(パンカド)を廃止、相対貿易(自由貿易)とする	
1656		明暦2	清王朝が海外渡航を禁じる海禁令を公布する	
1659		万治2	長崎の人口40,700人。オランダ船、伊万里大量輸出	
1663		寛文3	長崎史上最大の火事(寛文の大火)。町66的のうち63町焼失。奉行所も焼亡	
1669	寛文9	長崎の人口40,558人		
1672	寛文12	長崎80町となる。長崎の人口40,025人。市法商法になる		
1673	延宝1	イギリス船リターン号が長崎に入港、通商を願う。寛文11年から造営を始めた立山役所が完成し、西屋敷を西御役所とする		
西役所	1675	延宝3	市法会所が設けられる	
	1681	天和1	長崎の人口52,702人	
	1684	貞享1	清朝が展海令を發布して貿易を再開。唐船が長崎に殺到する	
	1685	貞享2	糸割符商法を復活	
	1689	元禄2	元禄元年に唐人屋敷が完成し、同2年に中国人を移す。長崎の人口51,359人	
	1694	元禄7	長崎の人口53,522人	
	1698	元禄11	長崎に大火が起きる(元禄の大火)。糸割符会所を改め、長崎会所を設置	
	1699	元禄12	長崎内町と外町の区別を廃止。地子銀を総町全て平等に配分する	
	1702	元禄15	長崎新地唐人荷物蔵を構築する	
	1703	元禄16	長崎の人口41,553人	
	1715	正徳5	長崎貿易新令(正徳新令)を制定し、貿易を制限する	
	1742	寛保2	貿易半減令を發布	
	1762	宝暦12	唐通事会所が設置される	
	1766	明和3	長崎に大火が起きる(西古川町の大火)	
	1778	天明8	長崎の人口32,364人	
	1784	天明4	唐人屋敷がほぼ全焼する	
	1791	寛政3	異国船取扱令を出す	
	1804	文化1	ロシア使節レザノフが、長崎に来航	
	1807	文化4	アメリカ船、長崎に来航	
	1808	文化5	イギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵入。西役所備場に石火矢(大砲)を備える	
1825	文政8	幕府、異国船打払令を發布		
1829	文政12	シーボルト、国外追放となる		
1838	天保9	長崎に大火が起きる(小川町の大火)。長崎の人口27,166人。地役人2,069人		
1845	弘化2	イギリス測量船が長崎入港。長崎の人口29,962人		
1846	弘化3	フランス軍艦3艘が長崎入港		
1849	嘉永2	アメリカ軍艦が長崎入港		
1853	嘉永6	ロシア使節ブチャーチンの軍艦4艘が長崎に来港。長崎台場が完成する		
1854	安政1	ロシアと条約交渉。イギリス軍艦4艘が長崎来港し、西役所で日英和親条約を締結		
1855	安政2	フランス軍艦が長崎来港。西役所に海軍伝習所を開設。長崎の人口27,381人		
1857	安政4	西役所に語学伝習所、医学伝習所を開設		
1859	安政6	神奈川(横浜)、長崎、箱根で貿易取引開始(開国)。オランダ商館閉鎖		
1861	文久1	小島療養所開設		

長崎の中国人居留地ともいえる唐人屋敷跡については、長崎市の宮下雅史氏（宮下 2012）、扇浦正義氏（扇浦 2014・2019）による陶磁器を中心とした研究があるが、最近、大阪市文化財協会の小田木富慈美氏によって唐人屋敷の検討が行われている（小田木 2019）。

長崎奉行所は、延宝元年（1673）に「長崎奉行所（立山役所）跡」と「長崎奉行所（西役所）跡」に二つに分かれたが、立山役所と西役所とに分かれる以前の奉行所については、「長崎奉行所跡」として、延宝元年以降については「長崎奉行所（西役所）跡」と「長崎奉行所（立山役所）跡」として区別しておきたい。長崎市立山町の「長崎奉行所（立山役所）跡」の場所には、1965年に長崎県立美術博物館が建設され運営されていたが2002年に閉館し、その場所に長崎歴史文化博物館が構想され、その建設に伴って2002年と2003年に発掘調査が実施されている。その調査報告書では、小松旭氏による古文書や絵図面を中心とした検討が行われ、川口洋平氏によって立山役所関係の遺構の変遷が捉えられている（川口編 2004、川口編 2005）。その跡地に建設された歴史文化博物館は、調査で見えられた立山役所の石垣階段を残して正門や建物が復元され、立山役所をイメージした博物館施設となっている。

岬先端の森崎にあった長崎県庁舎跡地は、長崎県庁舎移転計画によって2010年に「長崎西役所跡」として確認調査が行われ調査報告書が刊行され（林・宮武編 2011、河合・林 2012）、2018年に県庁舎が長崎市尾上町に移転に伴い、2019年度と2020年度に内容確認調査が行われ、南側に石垣が発見されるなどの発掘成果があり、2022年に「長崎西役所跡」の調査報告書がまとめられている（濱村編 2022）。この調査結果を基本資料として、現在、県庁跡地の活用について検討が進められている。

## 2. 火災の頻発する近世都市

日本列島は地震、津波などの災害が頻発する災害列島ともいわれ、計り知れない甚大な損害や被害がもたらされている。しかし、江戸を代表とする近世都市が被災を受けた災害のなかで、もっとも多く被害を受けたのは火災である。江戸で明暦三年（1657）に発生した「明暦の大火」では934町が炎上して、数万から10万人が死亡した大火として知られる。『災害都市江戸と地下室』を著した小沢詠美子氏は、「江戸の住居の多くが「焼家」とよばれる粗末な木造建築であったこともあり、いったん火が出ると大火になる可能性が高かった」と、江戸が頻繁に火災に見舞われていたことを指摘している（小沢 1998 p. 8）。また、江戸考古学の提唱者である古泉弘氏は、『江戸の穴』（柏書房）で、都心の地下には2 mから4 mにおよぶ縞状に堆積した土層が形成されているが、「赤茶けた土と、同様に赤く変質した瓦礫からなる」「火災によって生じた土層が、何枚にもわたって堆積」しており、「罹災→整地→建設といった一連のサイクルの繰り返しによって、地表が上昇していく現象」が捉えられるとして、「年縞」のように土層が重なった江戸・東京四百年の堆積層をレイヤードケーキの図として示している。そして、「これは江戸に限らず、京都や大坂など、ほかの近世都市にも共通してみられる現象」として、考古学的見地から江戸やほかの近世都市において火事の被災と復興の状況が捉えられることを指摘している。（古泉 1990 p. 220-223）。

近世長崎の歴史資料には、延宝元年（1673）に来航したイギリス船リターン号が港内に停泊し、寛文の大火で復興した長崎の情景が描かれているといわれる『寛文長崎屏風』や、延宝末頃（1680年頃）の町並みを描いた『箔屋屏風』などの絵画資料がある。それを見ると、当時の長崎には板葺屋根・板壁の建物が軒を並べており、瓦葺き土蔵を構えた家もある町の様子がうかがえる。多くの建物は板屋根・板壁の小沢詠美子氏のいう「焼家」の木造建築であり、出火すると江戸と同様に延焼して燃え広がって大火になる可能性が高かったことを示している（宮崎 2020 d）。

表2 長崎旧町の火事一覧表（月日は和暦）

西暦	和暦	火事・被災の状況	典拠
1601	慶長6	興善町より出火。教会の手前まで9ないし10町を焼き尽す。被災した蔵200以上	1
1614	慶長19	被昇天の聖母教会など市中にあった11ヶ所の教会が破壊され焼却される	2
1617	元和3	12月、200戸以上の家屋が焼け、その多くは貧しい中国人の家であった。	3
1633	寛永10	本博多町の長崎奉行今村伝四郎屋敷より出火。5・6町焼通り、森崎の糸割符宿老会所まで焼失。本博多町の奉行屋敷の敷地と会所を交換して森崎に奉行所を新設	4
1643	寛永20	8月26日、西中町より出火。恵美酒町まで焼失。西中町半数、恵美酒町3分の1焼失	5
1657	明暦3	10月2日、本鍛冶屋町出火。止宿唐人の荷物焼失	5
		11月16日、本紺屋町出火	5
		12月21日、東中町出火。6軒焼失	5
1659	万治2	8月26日、酒屋町出火	5
1660	万治3	11月12日、本興善町より出火。豊後町、新町、引地町、酒屋町、袋町に延焼	5
1660	万治4	8月26日、材木町出火	5
1663	寛文3	3月8日、筑後町より出火。総町66町のうち、57町全焼、6町半焼。金屋町、今町の2町と出島が焼け残る。2,252戸焼失。奉行所、寺社33及び獄舎など焼く。長崎史上最大の大火「長崎回祿」ともいう	4 5 7
1664	寛文4	6月1日、上町出火。22戸焼失	5
1674	延宝2	12月30日、今博多町出火。家3軒焼失	5
1675	延宝3	7月25日、西上町出火。家半軒焼失	5
		8月28日、今石灰町出火。小屋1軒焼失	5
		12月26日、大音寺下北比良出火。今鍛冶屋町に延焼	5
1677	延宝5	9月27日、新橋町出火	5
1678	延宝6	7月17日、外浦町より出火。西役所および江戸町北角の数十軒焼く	5
		8月25日、東築町出火	5
1681	天和1	11月15日、材木町出火	5
1684	貞享1	11月11日、勝山町出火。馬町まで類焼。4軒延焼	5
1697	元禄10	2月15日、本紺屋町出火	6
1698	元禄11	4月9日、西役所出火。屋敷中焼失し、東長屋1軒、大門長屋半分焼残	4
		4月21日、後興善町より出火。22町、2,044戸焼失。取崩107戸。内町14町（後興善町、新興善町、金屋町、船津町、桜町、今町、本五島町、樺島町、本博多町、新町、本興善町、豊後町、小川町、浦五島町）、外町8町（恵美須町、大黒町、西中町、西上町、下筑後町、上筑後町、東上町、東中町）。寺院2ヶ所、唐船22艘荷物入蔵33棟を焼く。「未次氏火事」「元禄の大火」	4 5 7 8
1701	元禄14	1月23日、本石灰町より出火。丸山町、寄合町全焼	4
1702	元禄15	12月、樺島町出火。町半分を焼く	5
1703	元禄16	10月8日、唐人屋敷出火。長屋3軒焼失	5
1704	宝永1	4月27日、本古川町出火（注）6文献では東古川町	5
1705	宝永2	8月11日、本下町より出火。本下町全焼。西築町、東築町焼少残。島原町半分焼。大村町少焼。船番長屋（江戸町）4軒焼失	4 5
		9月10日、唐人屋敷出火。長屋5軒焼失	5
1707	宝永4	8月13日、唐人屋敷出火。長屋1軒焼失	5
1708	宝永5	2月10日、榎津町より出火。10町焼失。今石灰町、新石灰町不残焼。東浜町、今鍛冶屋町、出来大工町半分焼。榎津町、萬屋町、油屋町焼少残。本古川町、今籠町少焼。	4 5
		6月26日、船津町より出火。9町焼失。小川町、東上町、上筑後町不残焼。船津町、金屋町、恵美須町半分焼。後興善町、豊後町、東中町少焼	4 5
1713	正徳3	1月23日、本五島町より出火。浦五島町まで18、19間四方焼失	4
1720	享保5	4月8日、八幡町出火。家9ヶ所、21戸焼失	4
1725	享保10	11月15日、西上町出火。東西22間半、南北10間半、9戸焼失	4
1730	享保15	9月6日、諏訪町出火	4
1735	享保20	11月25日、八百屋町出火。東中町、勝山町まで延焼。家17ヶ所55戸類焼	4
1736	元文1	12月9日、唐人屋敷出火。3棟焼失	4
		8月12日、本紺屋町出火。3軒焼失	4
		11月13日、桜町出火。3軒焼失	4
1737	元文2	12月4日、唐人屋敷出火。4棟と土神祠を焼く	4
1741	寛保1	1月15日、岩原目付屋敷出火	4
1744	延享1	東浜町出火。小屋4軒焼失	10
1752	宝暦2	出島東番所出火焼失	6
1753	宝暦3	10月16日、西中町出火。家4ヶ所焼失	4
1754	宝暦4	今博多町出火。5軒焼失	7
		10月14日、八百屋町より出火。御用物蔵普請方用屋敷その他、34軒62戸焼失。炉粕町に延焼し、安弾寺門前にて焼留る。「八百屋町火事」	4 7
1756	宝暦6	1月1日、今紺屋町より出火。中紺屋町、今魚町、引地町411戸焼失。他に町使屋敷1軒焼失。「今紺屋町大火」	4
		1月31日、出島内の小屋失火	4
1760	宝暦10	9月23日、唐人屋敷内の土神祠失火	4
1763	宝暦13	12月26日、今魚町出火	4
		9月7日、船津町出火。3軒焼失	4
		12月1日、勝山町出火	4
1765	明和2	1月24日、西浜町1軒失火	4
1766	明和3	12月13日、酒屋町出火	4
		12月23日、西古川町より出火。本古川町、東古川町、今鍛冶屋町、出来鍛冶屋町、今籠町、今石灰町、新石灰町、油屋町、榎津町、万屋町、東浜町不残焼、1928戸。西古川町、西浜町、銀屋町、磨屋町、銅座跡半焼、452戸。柳川蔵屋敷、五島蔵屋敷、久松嘉兵衛屋敷、大音寺、崇福寺門、現応寺、南光寺、聖寿院、良泉院、金蔵院、快行院等焼失。「西古川町大火」	4 7
		5月7日、大黒町より出火。西中町延焼、32戸類焼。取崩5戸、半取崩14戸。肥後蔵	4